

# ふるさと歴史アラカルト

## 岩国と『花燃ゆ』ゆかりの人物② 吉田松陰②

(1830~1859年)

今回は、吉田松陰が岩国を通った残り三回の内容を紹介します。

嘉永6年(1853)年、松陰は諸国遊学が許可されて江戸へ行っています。『癸丑遊歴日録』によると、その途上の2月2日、大島(周防大島町)から船で通津に入っています。通津で一泊した後、船で新港まで行き、岩国の城下を訪れました。その部分には「新港に到着した。芸州(広島)の商人はここから上陸している。私も上陸して岩国の城下に行き、錦帯橋を見た。橋の近くに諫櫃(いさびつ)というものが置いてあった。その掲示文がとて素晴らしかった。橋は錦川に架かっており、川が海に注いでいる所が今津となつてゐる」と書かれています。諫櫃は、岩国では訴訟箱と呼ばれていたもので、その掲示文には、藩政に対して不満があれば、身分を問わず訴えてほしいと書いてありました。松陰はこの文章を褒めたのでしよう。なお訴訟箱は、幕末の思想家として知られる横井小楠も記録で触れていることから、当時、岩国の政治の

評判が良かったことがうかがえます。

安政元(1854)年、松陰は金子重之助とともに下田(静岡県)でペリーの船に密航しようとして失敗し、自首した後、江戸から萩まで護送されました。『吉田寅次郎 金子重之助 護送日記』によると、その道中の10月20日、柱野で昼食をとり、高森の亀屋市之進宅に一泊しています。また当時重病だった金子は、代々高森の医師の家系であった三戸玄庵の診察を受けて薬を出されています。宿泊地の跡地には、現在、記念碑が立てられています。

安政5(1858)年、松陰は朝廷の許可を得ずに日米修好通商条約へ調印した幕府の政治を批判し、翌6年、江戸に護送されます。『涙松集』には、その際に芸州との国境である小瀬で詠んだ歌「夢路にもかへらぬ関を打ち越えて今をかぎりと渡る小瀬川」が記されています。夢でも戻ってくるできなないというこの歌のとおり、松陰は10月27日、安政の大獄により29歳の若さで処刑されました。



▲吉田松陰歌碑(小瀬)



▲吉田松陰先生宿泊の地(周東町高森)

### いわくにちようこかん 岩国徴古館

昭和20年に旧岩国藩主吉川家によって建てられ、その後岩国市に移管された市立の博物館

住所：横山二丁目7-19 ☎0452  
休館日：月曜(祝日の場合はその翌日)

## 岩国市 人口・世帯

人口 141,729人【前月比 -128人】 男性 67,112人 女性 74,617人

世帯 66,663世帯【前月比 -55世帯】 ※外国人人口を含む(平成26年11月1日現在)

交通事故発生件数 10月分事故件数 49件(433件) 死者数 1人(7人) 傷者数 57人(510人)

※高速道路発生分を除く

※( )内は平成26年累計

### 広報テレホン

休日在宅医療機関、イベント情報などをお知らせしています。テレホンサービス ☎231234

### 目の不自由な人へ

「広報いわくに」のカセットテープをお貸しします。音声読み上げのためのテキスト版を、ホームページに掲載しています。

お問い合わせはお気軽に、秘書広報課広報班へ ☎295016 FAX213337